「国語国文学研究」第四十九号　抜刷
平成二十六年三月六日　発行

『梶井基次郎の文学』総説

古閑　章

『梶井基次郎の文学』総説

古閑　章

緒言

『梶井基次郎の文学』（二〇〇六年三月、おうふう、A五判、六四六ページ。以下、「本書」と総称する）は、「序　本書の構成」で述べるように、全三部と資料編から成る。

「第一部　本論編」では、梶井基次郎の文学を書き手と作品の相関関係を視座に検討する。タイトルの「梶井基次郎の文学」は、残された作品の文学価値をどのように跡づけるかに重点を置いたもので、梶井基次郎に関する伝記的事実の調査や研究を目的としていない。その第一の要点は、そうした研究成果を援用し、梶井文学の存在意義や文学価値を洗い出すことにある。個々の作品の成立事情やそれにまつわる創作過程、作品の独自性や豊かさを、作品分析を通して浮かび上がらせる。梶井基次郎という稀有な文学者の創作の秘儀を解き明かし、作品のテーマや目的、表現構造、書き手の意図やモチーフを綿密に追究する。可能なかぎり恣意を排し、研究史を視野に入れ、科学的な方法意識を心がけつつ、作品の内部律（読み手の読みに従って結像する作品の相貌やその相貌を要請する作品自体の法則を指す）を浮き彫りにする。そして、究極的に梶井文学の全貌を文学的出発期から最晩年の営為に至るまでを統一的に把握することで、第一部の目的が達成されるよう構造化されている。

「第二部　周辺研究」では、梶井文学がどのような先行文学の影響を受け、同時代文学との共振関係を持ち、また後代文学への波紋を投げかけているかについて、友人・知己の証言や文章、残された書簡、具体的な作品の比較・検討を通して考察する。梶井文学の波紋を広く文学史の中に位置づけ、志賀直哉・川端康成・梅崎春生という個性的な書き手や作品と梶井文学との連関を追究する。第一部が、書き手や作品のモチーフやテーマに焦点を当て、その立体構造を内部から求心的に捉えた梶井文学研究とするなら、第二部は、書き手の生きた時代の問題を視野に入れ、外部から遠心的に捉え返す試みである。人間は常に時代との連関で生きている。梶井文学を総合的に把握するには、外部と内部の問題を念頭に置き、ミクロとマクロの視点を

有効に機能させることが重要である。

「第三部　発展編」では、第一部における書き手と作品の相関図を、もう一度読み手の問題に絡めて考察する。梶井文学を書き手と作品の内的連関を軸に検討した第一部に対して、第三部では読み手の「読みの方法」に心を砕きつつ、「檸檬」と「路上」に的を絞る。そこで布置された「読みの共振運動論」という方法によって、梶井文学の新たな側面が焙り出される。書くことと読むことを同次元の位相に置く方法は、文学の意味や価値を抽き出す上で有効である。書き手の自作に対する共振運動過程を措定し、かつ、読み手の書き手に対する共振運動過程を対置する視点は、これまで無意識的に運用されてきた書き手と読み手の往還的な「読み」「書く」行為の相補性を再認識させる。あわせて、そうした共振運動過程が「読むことによる」「書くことによる」自己変容過程を誘発している側面に注目することで、書き手と読み手の読み・書く行為が決して別ものでないことを明らかにする。「読みの共振運動論」という文学理論を導入することで梶井文学の新たな側面が発見できよう。

最後の「資料編」には、梶井文学の代表作である「檸檬」研究史、単行本として刊行された研究書や雑誌、檸檬忌に関する短文、さらには梶井基次郎略年譜を掲げる。「檸檬」研究史を辿ることは、梶井研究史を整理するに等しく、今後の梶井研究の見取り図を示す意味がある。梶井基次郎に関する個別の評伝や研究書・文学鑑賞本・雑誌特集などの数は、メジャーな文学者でないにもかかわらず、少なくない。そこで、書誌情報を目次と共に掲載した。これまで大部の梶井基次郎研究文献目録にも登録されていない雑誌が掲出されている。

一九九四年十一月に『梶井基次郎研究』（おうふう）を刊行してすでに二十年近くが経過した。その間、梶井文学を視野に入れつつ、文学理論としての「読みの共振運動論」の構築と具体的な文学作品への実践を手がけてきた。第二部および第三部は、「読みの共振運動論」を構築・展開する過程で結実したものである。その際の苦心は、第一部と第二部以降の整合性を確保し、いかに一貫した論として筋を通すかにあり、結果的には、そうした意識を保持しつつ、第一部を第二部・第三部・資料編によって反照させることによって『梶井基次郎研究』段階では捉え切れなかった文学事象を顕在化させることになった。「梶井基次郎研究」から「梶井基次郎の文学」へ焼き直す作業は、単なる論の寄せ集めではない有機的な連関の下に見通すことを可能にしたのである。

本書は、文学史や読みの方法を視野に入れながら、梶井文学を総合的に価値づける試みにほかならない。

〔一〕　目次

序　　本書の構成
第一部　　本論編―書き手と作品と読み手の相関を軸として―

序　章　方法の磁場
第一章　総説―梶井文学の見取り図―
第二章　初期習作の世界―小説家への道―
第三章　「瀬山の話」―同時代文学との連関―
第四章　「檸檬」―善美の象徴―
第五章　「城のある町にて」―死（病気）と生（性）のロンド―
第六章　「泥濘」―精神のぬかるみ―
第七章　「路上」―破滅の相貌―
第八章　「橡の花」―小説の方法―
第九章　凝視のメカニズム―「ある心の風景」「Kの昇天」
第十章　「桜の樹の下には」「ある崖上の感情」―
第十一章　「冬の日」―青春の絶唱―
第十二章　「蒼穹」と「筧の話」―「闇」の現前―
第十三章　「冬の蝿」―運命の背中―
第十四章　他者意識の変容―梶井書簡を視座として―
第十五章　「愛撫」―生の安らぎ―
第十六章　「闇の絵巻」―「闇」の深化―
第十七章　「交尾」―視線のゆくえ―
終　章　「のんきな患者」―現実への回帰―
展望・その問いかけるもの―「推敲」の問題―

第二部　周辺研究―先行文学・同時代文学・後代文学との連関を探る―
第一章　総説―梶井文学の波紋―
第二章　志賀直哉「城の崎にて」と「冬の蝿」
第三章　川端康成
第四章　梅崎春生

第三部　発展編―「読みの共振運動論」から見た梶井文学―
第一章　読みの方法―「読みの共振運動論」の提唱―
第二章　「檸檬」
第三章　「路上」
第四章　読みの方法再説―近代文学研究のアポリア―
第五章　新たな「書き手論」に向けて

資料篇
Ⅰ　「檸檬」研究史
Ⅱ　梶井基次郎研究単行書一覧
Ⅲ　一冊の本・「檸檬忌」に寄せて
Ⅳ　梶井基次郎略歴
初出一覧
あとがき

〔二〕「第一部　本論編」の「方法の磁場」

太宰治『津軽』（一九四四・十一、小山書店）本編冒頭部は、語り手「私」とほぼ同年齢で亡くなった小説家たちの名前の列

記から始まる。

故郷への回帰を手がかりに、もう一度自分の人生を辿り直したい小説家の「私」は、「苦しいから」旅に出ると言い訳しつつ、人生の曲がり角に差しかかった将来の展望を過去の著名な文学者の死亡年齢に重ね、その苦渋の思いを表白する。「私」の口ぶりはいささか自嘲気味でふざけているが、それにしても、すべて数えで記された文学者たちの年齢は、たとえば「正岡子規三十六、尾崎紅葉三十七、斎藤緑雨三十八、国木田独歩三十八、長塚節三十七、芥川龍之介三十六、嘉村礒多三十七」というものである。そして今なら、この夭折者たちの一群に、当の「太宰治四十、宮沢賢治三十八、中島敦三十四、梶井基次郎三十二、中原中也三十一」という一項を付け加えてもよいだろう。

これら短命な文学者に共通する特徴は、存在の根源に突き入る強烈な言葉のイメージと、その反映としての、読み手の脳裡に焼きつけられる作品の輝きということになる。しかも、その作品は生命と引き換えに勝ち取られたという印象から免れがたいために、若ければ若いほど、作品に注ぎ込まれたエネルギーの純度は高まって見える。ましてや、樋口一葉二十五、北村透谷二十六、石川啄木二十七の極めつけの例になると、その感はますます深い。

そういう明治以降の文学者群像にあって、梶井基次郎は、一九〇一（明治34）年二月十七日大阪に生まれ、一九三二（昭和7）年三月二十四日、同地で鬼籍に入った小説家である。享年三十二。人生のフィールドをあわただしく駆け抜け、夭折という言葉がまさに相応しい短命の要因は、当時の死病の結核であった。

けれども、その短命に比べて、死後、作品の輝きは増すばかりである。生前、文壇の一角に少数の知己を得ていたにしても、一般大衆にはほとんど知られていなかった梶井基次郎。にもかかわらず、死後、その作品は、同時代のみならず、それ以降の読み手に受け入れられていくことになる。そこにはさまざまな要因が指摘できるが、取りあえず、この時点ではその詳細には立ち入らずにおこう。というより、当面の読み手の興味や関心は、あまりの短命と引き換えに得られた傑作群の拠って立つ基盤を方法的に探ると共に、作品誕生の鍵を意識的に摑みたいという欲求にある。その実質上の文学活動はわずかに十年にしか過ぎないけれども、短いものは短いなりに、一律に括れない内実に包まれている。それは時代との関わりと連動した内面の深化、文学観の変容、さらには個々の作品を制作する過程で生じる紆余曲折などを通して、具体的に浮かび上がる問題系にほかならない。すなわち、書き手と読み手双方は、書く行為や読む行為を通して、自己に必要な文学対象を追い詰め、みずからを生かす何ものかを必死に抽き出そうする衝動をお互いに共有している。そしてこうした意識を保持することは、最終的に文学作品の豊かさを確認するための必要条件になる。

そこで、その全体像を定立する方法として、以下に五項目を

提示する。

〔一〕梶井基次郎という書き手の文学的出発期から晩年の営為にいたる道程を通観し、そこに刻印された書き手と作品の特質を浮き彫りにする。これは、書き手と作品の特質を究明する作業を通して、最終的には梶井基次郎の独創を定立することである。書き手が言葉によって世界を分節するというテーゼを具体的に言表化した形が文学作品とするなら、梶井基次郎という特定の書き手の出発期から最晩年に至る道程を言語表現の分析を基軸に通観する作業は、そこに刻印された書き手とその作品の特質を浮き彫りにすると共に、究極的には文学史上の独創を明らかにするはずである。

〔二〕梶井基次郎という書き手は、作品を書く行為を通して、新たな自己に立ち向かう存在である。かつ、読み手は、書き手とその作品の読みの行為を通して変容する存在である。このことは、取りも直さず、両者が常に相補関係にある事実を示している。書き手と作品と読み手とは、読みの行為を通して共に循環構造を形作る存在である。

〔三〕梶井基次郎は、一九二〇年代から三〇年代にかけて文学活動を行い、その間ジャーナリズムの上ではほとんど無名の文学青年に過ぎず、死後急速に評価の高まった小説家である。そこで、処女作「檸檬」から絶筆「のんきな患者」に至る道程を綿密な作品分析を積み重ね、実証的かつ体系的に把握する作業が求められることになる。

〔四〕「第一部　本論編」の眼目は、書き手や作品と読み手の有機的な連関やその連動した関係構図を手がかりに、作品成立の基盤である書き手のさまざまな問題を究明する作業となる。その結果、個々の作品は、作品成立時点での方法やモチーフ・テーマ・文体・時代思潮・ジャンルの問題といった多角的な視点から考究されることになる。作品が紡ぎ出されてくる磁場を確認しつつ、創作活動の原初に発光する書き手の精神の劇をつぶさに検証することは、書く行為にまつわる創作の秘儀を探究することである。作品の構造分析はミクロな作業に属し、その構造分析を踏まえた文学者研究はマクロな視点の上に成立する。読み手は、梶井基次郎という文学資料を対象に、遠心的かつ求心的な読みの磁場に自己を解放する者である。

〔五〕一般に、梶井基次郎は私小説作家の範疇に編入されがちだが、資質を「読みの共振運動論」という文学理論で再検討し、私小説の一特質である身辺雑記性やその発展型としての心境小説の内面性に対置しうる、明確で意識的なモチーフやテーマで測定し直してみるなら、通常の私小説概

念では律し切れない小説家の相貌が立ち上がってくる。そうした認識を保持し、梶井独自の美意識や表現構造に注目しつつ、パースペクティブな小説家像を追尋することである。書き手と作品と読み手の循環構造を視野に入れた文学者像の構築を目差すことが本書の重要な課題のひとつとなる。

小説を読むことの難しさは、小説を読む行為を通して、それを書いた小説家の人生と、それを読む読み手の人生が重なってくることにある。そしてその行為の難しさは、やがて楽しさでもあることが理解されることになろう。安易な人生観に身を任せることが充実した人生をもたらすとは限らないように、小説と人生は表裏一体の関係を保つことで、逆説的に、難しくも楽しくもなる存在として読み手に働きかけてくるようになるだろう。もちろん、小説は虚構であり、物語を楽しむだけでよいという考え方も成り立つ。しかし、日本近代文学を構築したメインの書き手たちは、みずからの人生を文学活動の中にまるごと投入し、まさに人生の形代としての作品創造に邁進した。そういう意味では、書き手の文学活動は人生の意味を問う生真面目な営為となる。先の五項目の基本理念は、読み手自身の人生の問題を意識化し、梶井文学の意味を問う作業を通して、日本近代文学の存在理由をも検証する試みに転化する。

梶井基次郎は、日本近代文学の本流を歩いた、文学の神に魅入られた小説家のひとりであった。「第一部　本論編」では、歴史的存在としての梶井基次郎を意識しつつも、第一義としては、あくまでも彼の残した作品を価値づけることにある。「梶井基次郎の文学」と題する理由である。時代の制約を受けざるをえぬ書き手の意図は意図として、作品をいかに現代に蘇らせるかに第一部の目論見がある。「書き手―作者―作品―読者―読み手」の連鎖構造（循環構造）を断ち切ることなく読みの行為を遂行すること。それは書き手や作品を読む行為が人間を読む行為、つまりは自己認識の営為にほかならないことを明示している。言うは易く、行うに難い作業であるが、日本近代文学研究の中心課題がこの文脈に据えられていることは事実である。

〔三〕「第一章～終章」に至る全十八章の特色

第一章「総説」では、梶井文学の全体像を提示する。約二十編の初期習作の世界を「倫理的側面」と「美的・感覚的側面」の二側面に整理し、それが「瀬山の話」に集約され、さらにそうした二側面が「美的・感覚的側面」に統一・収斂される「檸檬」誕生の舞台裏を検証する。試みに、初期習作の系統樹を示す。

A群……倫理的側面を問題にした習作群

ⓐ暴力・腕力を問題にしたもの

「小さき良心」（一九二二・九）「洗吉」（一九二二・十二）

「卑怯者」（一九二三・一～二）

「カッフェー・ラーヴェン」（一九二三）

ⓑ飲酒・放蕩による実生活の乱れを問題にしたもの

「裸像を盗む男」（一九二二晩秋）「帰宅前後」（一九二二・十二～二三・一）

「彷徨」（一九二三・二）「母親」（一九二三・四～五）

ⓒ自我にまつわる内面性を問題にしたもの

「大蒜」（一九二三・四～五）「奎吉」（一九二三・五）

「矛盾の様な真実」（一九二三・五）「瀬戸内海の夜」（一九二三・八）

「夕凪橋の狸」（一九二四・五～八）

ⓓ東京時代の生活を扱ったもの

「不幸」（一九二二）「凧」（一九二五）

ⓔ失恋体験に根ざしたもの

「河岸」（一九二二夏）

ⓕ芸術と実生活の相克を描いたもの

「攀ぢ登る男」（一九二二秋）

B群……美的・感覚的側面を問題にした習作群

ⓖ感覚的享楽を主題化したもの

「秘やかな楽しみ」（一九二二）

「秋の日の下」（一九二二秋）

ⓗ美意識を前面に打ち出したもの

「鼠」（一九二二秋）「犬を売る男」（一九二四夏～秋）

「太郎と街」（一九二四・十）

「貧しい生活より」（一九二四・五～六）

「瀬山の話」（一九二四・十）―「檸檬」（同上）

「雪の日」（一九二五・二）「汽車その他」（同上）

「檸檬」は、初期習作の多様性が「美的・感覚的側面」に収斂され、結果的にあらゆる可能性を限定する形で誕生した作品ということになる。その上で、「檸檬」から「Kの昇天」に至る前期の文学、「冬の日」という前・後期のはざまに佇立する作品、湯ヶ島時代の頂点をなす「冬の蝿」、帰阪後の文学を代表する「闇の絵巻」や「のんきな患者」の特質が追尋されることになる。前期の文学に認められるカタルシスが「冬の日」に認められない特質や、それに代わる「闇」の登場、マルキシズ

ムの洗礼・昇華による家認識の改変など、梶井文学における「檸檬」「冬の日」「のんきな患者」という三つのメルクマールを押さえた梶井文学の見取り図は、初期習作の世界およびそれ以降に完成された二十編の作品を論じる第一部全十九章の隅々に前史的にトレースされている。

第二章「初期習作の世界」では、第一章に掲げられた約二十編の初期習作の系統樹に従いながら、その詳細な作品分析を試みる。梶井基次郎という文学青年は、この初期習作の世界を閲することによって紛れもない小説家の道を歩み始めたと言ってよい。

第三章「瀬山の話」では、初期習作の集大成である「瀬山の話」が同時代文学をいかに吸収・昇華しながら造型されていったのかを考察する。佐藤春夫「田園の憂鬱」(『中外』第二巻第十号、一九一八・九)と「瀬山の話」の表現構造の類似から、佐藤文学と梶井文学の類縁性や影響関係を指摘する。また、ダダイズムや表現主義の影響を受けた活字の組み方をタイポグラフィーの観点から考察し、「瀬山の話」と同時代文学との密接な連関を浮き彫りにする。

第四章「檸檬」では、作品冒頭の有名な「えたいの知れない不吉な塊」の内実が、肉体と精神および時代の問題と無縁でない事実を、従来の研究史の批判的検討を通して浮上させる。そして、丸善を爆破する心理過程をアリストテレスのカタルシス理論を援用しながら、善美の象徴としてのレモンが明らかに文学における慰安の役目を果たしていると論証する。美的自己慰安の文学「檸檬」の価値を闡明にした、本書の要の位置に据えられる一章である。

第五章「城のある町にて」では、梶井文学の作品系列でもっとも向日的な作品評を受けている「城のある町にて」が、実はその水面下に病気や死の問題を抜き差しならない形で潜めている事実を指摘する。これまで一貫した筋のない、組曲風の作品と見られがちであったが、死のメタファーである病気の意味にメスを入れると共に、作品の重要なキー・ワードとして「死(病気)」と「生(性)」をクローズアップし、作品を貫く主潮音を顕在化させた。「城のある町にて」は、死に際会した人間のその圏域からの脱出と、生への参入のドラマを描いた作品である。

第六章「泥濘」では、小品とはいえ予想外に産みの苦しみを味わった執筆過程を検討しながら、精神のぬかるみ状態をユニークな表現で精細に描き、あわせてそのテーマがカタルシスと密接に関わる心的鬱状態からの脱出にあったことを指摘する。

第七章「路上」では、高等学校国語教材としての「路上」の価値に光を当てると共に、梶井文学における位置の低さに異議を唱え、従来の読みの誤りを詳細な作品分析を通して検証する。体験を書くことの意義を青年期の問題意識に絡めて提示した「路上」は、雨上がりの坂を滑り降りるという極めて日常的な行為に貼り付いた破滅の相貌とそれに付随する茫漠とした不安

感、現実の不可知性などを見事に描いた佳作である。

第八章「橡の花」では、梶井の小説観や文学観を「橡の花」という失敗作を通して検証する。自作を大事にした梶井には珍しく「橡の花」を嫌悪し、厳しく失敗作と断定した理由は、梶井の身近な友人・知己を安易に採用したモデル問題や表現の弛みにあり、それが私小説の身辺雑記性に連動する形で、梶井晩年の小説観や文学観に抵触することになった。「橡の花」に対する梶井のスタンスを検討することは、梶井文学の裾野の広さを再発見しうる契機となる。なお、この章の〔補注〕は、鈴木貞美編『梶井基次郎全集』全四巻（一九九九・十一～二〇〇〇・九、筑摩書房）で習作と位置づけられた「橡の花」に対する、鈴木氏の偏った文学観や小説観への異議申し立てとして付け加えた文章でもある。

第九章「凝視のメカニズム」では、「ある心の風景」「Kの昇天」「桜の樹の下には」「ある崖上の感情」の四作品を分析することにより、梶井文学における視覚の意味について考察する。想像力と連動した梶井文学の視覚の重要性は、そこに形象された言葉の分析によって明らかになる。

第十章「冬の日」では、先に第一章で指摘したように、「冬の日」がカタルシスを峻拒する作品構造を持つという内部律を踏まえることにより、前期の文学に属するのではなく、この一作のみで前・後期のはざまに佇立する作品であることを論証する。作中に使用された「滅形」というキー・ワードを梶子にアプローチすると、死生の間に呻吟する主人公の生の態様が見事に把握され、その結果、「冬の日」は青春の絶唱を悲愴的に謳い上げた作品という評価が得られることになる。

第十一章「蒼穹」と「筧の話」では、梶井文学における「闇」の態様を検証する。この二作に表象された「闇」は、「冬の蝿」や「闇の絵巻」で獲得された「闇」の深さ・豊かさ・安らかさとは本質的に異なるが、にもかかわらず、湯ヶ島の自然に認められる漆黒の「闇」の存在なくしては成立しないものでもある。「檸檬」のバックに控える「闇」からすると、それは死の影を色濃く引き摺った怖れに満ちている。

第十二章「冬の蝿」では、「冬の日」の世界を通過した主人公の生がさらに深刻な様相に彩られていることを検証する。冬の蝿の生態が主人公のそれに重ね合わされ、結末における冬の蝿の死がみずからの将来を暗示する暗い認識と共に語り収められている。「闇への情熱」は「生への情熱」のシノニムだが、「運命の背中」を透き見る語り手の絶望感は深い。湯ヶ島時代を代表する「冬の蝿」は、梶井文学に形象された「闇」の重層性をあますところなく捉えた力作として注目に値する。

第十三章「他者意識の変容」では、「町人根性」を激しく嫌った第三高等学校時代（一九一九・九～二四・三）の梶井が、一九二四年四月東京帝国大学に進学すると共に小説家・梶井基次郎に成長し、やがて湯ヶ島時代を経て帰阪後の文学を構築する道ゆきを、その内面の変容過程を窺わせる書簡や日記を材料に

分析する。梶井文学におけるマルキシズムの受容過程は、湯ヶ島時代（一九二六年十二月三十一日～二八年五月中旬）の精神の変容過程をその前史として、一九二九（昭和四）年一月四日の父・宗太郎の死を契機として獲得される肉親や他者意識のそれに重ね合わせて理解する必要がある。

第十四章「愛撫」では、その前後で激しく揺れ動いている梶井の意識が、一時的に動きを止めている事態を指摘する。比喩的に言えば、「愛撫」は梶井文学に束の間訪れた台風の眼であり、「生の安らぎ」を完璧に描いた作品である。

第十五章「闇の絵巻」では、「冬の蝿」に描かれた「絶望に駆られた情熱、闇への情熱」（一九二七・十・三十一付北川冬彦宛書簡）が「闇の安息」に変わる過程を踏まえながら、「闇」を「絵巻」に見立てる視点の独自性を検証する。そこに介在しているのは、帰阪後の精神の変容過程であり、新たな認識の獲得である。「自分の心が風景に縛られてゐる」という一九二九（昭和四）年頃の断片が志向する領域は、和辻哲郎『風土』（一九三五・九、岩波書店）の内実に近似している。「闇の絵巻」のモチーフやテーマは、「闇」を波動と捉える理系的思考や、見えないものを実体的に視覚化する表現構造を通して、極めて鮮やかに形象されている。

第十六章「交尾」では、上昇志向から下降志向への視線の変換が作品の背後に秘められ、さらに〔その一〕〔その二〕の世界が実は完成されずに終わった〔その三〕の世界によって相対化されるはずであった可能性の領域を指摘する。そこに窺われるのは、「のんきな患者」に接続する庶民への哀歓であり、現実認識の深化による下降志向の視線の獲得である。

第十七章「のんきな患者」では、タイトルの「のんき」の語法を梶井文学の初期に遡って検証し、時代に流されぬ梶井独自の抵抗の姿勢を指摘する。あわせて、主人公を突き放して眺める客観的距離がこの言葉から得られたと見なし、その結果、それまで一人称単数の視点で捉えられていた梶井文学が、三人称複数の文学世界を志向するようになった可能性を検討する。こうした事態は、他者意識の成熟が梶井晩年の思想に反映された結果であると共に、第一作品集『檸檬』（一九三一・六、武蔵野書院）とは大きく異なる「のんきな患者」の文体が、事実や現実の世界を平易に語る意識からもたらされたと判断しうる根拠ともなる。従来「のんきな患者」は、梶井文学の位置づけにおいては低かったが、ここで志向された三人称複数の世界は、梶井文学の転換を告げる画期的な意味を持っていたことになる。

終章「展望・その問いかけるもの」では、梶井文学における言葉や表現構造の比類なさを、「推敲」の視点から再検討する。原稿用紙に換算すると、その大半は十枚前後の短編小説に過ぎないが、にもかかわらず、その完成までには気の遠くなるような「推敲」過程が存在する。そしてこの場合の「推敲」は、眼に見えない「時間」概念と同義の働きをもって梶井文学に作用している。そしてその推敲という時間の重石が、凡百の小説家

の追随を許さぬ表現の高みに個々の作品を押し上げたと言える。梶井文学の検証は、究極的には日本語の分析に帰着するというのが終章の、ひいては第一部本論編の結論でもある。

〔四〕「第二部　周辺研究」の眼目

第一章「総説」では、梶井文学がどのような先行文学の影響を受け、同時代文学との共振関係を持ち、また後代文学へ波紋を投げかけているのかについて、友人・知己の証言や文章、残された書簡、具体的な作品を提示しつつ、実証的に論述する。これまで梶井文学に影響を与えた文学者として松尾芭蕉・夏目漱石などが指摘されているが、本章ではそうした動向も含め、梶井文学を広く文学史の中に位置づけ、白樺派・モダニズム・表現主義・プロレタリア文学・第一次戦後派・第三の新人に連なる系譜を洗い出すと共に、先行文学・同時代文学・後代文学との連関を通時的に考察する。第一部が内部から求心的に捉えた梶井文学研究とするならば、第二部は、時代や文化の要素を視野に入れ、外部から遠心的に捉え返す試みとなる。人間は常に時代や社会との連関で生きている。梶井文学を総合的に把握するには、外部と内部の問題を念頭に置き、ミクロとマクロの視点を有効に機能させることが重要である。

第二章「志賀直哉「城の崎にて」と「冬の蝿」」では、両者の代表作の比較・検討を通して、その同質性と異質性にアプローチする。従来、志賀文学に対する梶井基次郎のオマージュは周知の事実で、両者の文学は同質性の面を強調されてきた歴史を持っている。けれども、「城の崎にて」（『白樺』第八巻第五号、一九一七・五）と「冬の蝿」を比較・検討することで浮かび上がってくるのは、同質性と同時に異質性の問題である。志賀文学は生者の視点から世界を捉えるのに対して、梶井文学は死者の側に身を置く地点から一気に反転し、新たな生の問題を剔抉する、という特質がある。こうした決定的な違いは、両者の代表作を分析することによって明らかになる。

第三章「川端康成」では、川端と梶井の人間的交流関係を押さえながら、それが文学上の共振関係に及んでいる事実を考察する。たとえば「檸檬」における「見すぼらしくて美しいもの」と近接関係にある川端文学の「きたない美しさ」（「文学的自叙伝」、『新潮』第三十一年第五号、一九三四・五）は、美醜に対する両者の感覚が近似することを物語っている。梶井が新感覚派の中で川端文学を何よりも評価していた事実は、初期の川端文学の美意識と梶井文学のそれとが極めて近い位相にあることを明示している。

第四章「梅崎春生」では、梶井文学の「瀬山の話」と梅崎文学の「風宴」を俎上に載せ、両者の同質性と異質性を指摘する。梅崎が梶井文学から学び、いかに昇華しようとしたかについての痕跡は、梅崎文学のさまざまな作品に残されている。しかし、決定的な違いもある。それは戦争の問題で、梶井文学における

結核が梅崎文学における戦争とパラレルな関係にあることは事実だが、強制された戦争による死の問題は、結核とは異なる側面を露呈させている。国民病としての結核の恐ろしさが個人の領域を超えた内実を含むことは確かであっても、それが戦争という国家によって強制された死と決定的に異なることは事実であろう。梶井文学に希薄な国家と個人の関係性が、梅崎文学の代表作である「桜島」には形象されている。

〔五〕「第三部　発展編」の主眼

第一章「読みの方法」では、「読みの共振運動論」という新たな読みの方法の構築を目指す。「読むことは書くことであり、書くことは読むことである」という「読み・書く」行為を同次元の位相に置く方法は、文学の意味や価値を抽き出す上で有効である。書き手の自作に対する共振運動過程を措定し、かつ、読み手の書き手に対する共振運動過程を対置する視点は、これまで無意識的に運用されてきた書き手と読み手の往還的な「読み・書く」行為の相補性を再認識させる。あわせて、そうした共振運動過程が「読むことによる・書くことによる」自己変容過程を誘発している側面に注目することで、書き手と読み手の読み・書く行為が決して別ものでないことを明らかにする。「読みの共振運動論」という文学理論を導入することで、梶井文学の新たな側面に鍬を入れることが可能となる。

ところで、「読みの共振運動論」という新しい読みの概念を説明する前に、いくつかの前提が必要になるので記しておこう。

「書き手―作者―作品―読者―読み手」という連鎖構造が、当面の読みのモデル概念ということになる。生身の書き手およびその書き手が作品を書く次元で概念化される「作者」という装置が、この文脈で押さえるべき重要項目である。しかも、この連鎖構造は、往路と復路とから成る二方向の循環性を持つと同時に、円環としての磁場を構成する。

「作者」という概念を、作品の語り手を統括する主体であると見なすと共に、語り手を通して作品を統括する主体でもあると規定すると、「書き手」という概念は、「作者」を統括する主体であり、たとえば自作のAという作品からBという作品へ架橋する主体として機能していることが明瞭になる。「作者」は作品に関わる装置で、生身の「書き手」は実生活を生きる人間としてさまざまな問題を抱え込みながらも「作者」という概念装置に表現者としての自己を注入している実態が把握できる。すなわち、作品の問題を究極的に統括する主体として機能するのであり、作者に関わる書き手は、実生活を昇華した次元に構築される表現者と見なすことができる。

生身の書き手が表現者としての自己像を生成し続ける行為そのものに、実生活を超克する過程が連動していることになる。作品を書き続ける行為は、書き手のイメージを生成し、そうした書き手のイメージを生成する側に読み手は加担している。書

き手のイメージが生身の書き手自身によって創られる事実もさることながら、読み手自身の読む行為が書き手のイメージを立ち上がらせていることになる。ひとつの文学者像の構築が、その両者の溝をいかにして埋めるか、という読みの問題に帰着せざるをえない理由である。

読み手は、書き手やその作品に興味を持つ。その結果として、書き手とその作品世界がどのように構築されているかを確定したくなる。作品を書く生身の書き手への興味や関心と言ってよいが、そうなると、そうした検証作業の過程に書き手の時代意識を測る項目が付加されると共に、読み手の構築する文学者像に、時代の復元を視野に収めた文学史像が不可欠になるのも当然である。

興味や関心の根本には、書き手とその作品に対する心の動きがある。通常、それは「感動」や「共鳴」という言葉で押さえられているが、それを文学行為に付随する「共振」という概念で再定義したい。

自然科学用語としては、すでに「共鳴」という言葉が存在する。「共振」と「共鳴」は同じ概念を内包する言葉である。自然科学用語としての共鳴は広く一般化した言葉で、「ある事実や考えなどに同感すること」（小学館『日本国語大辞典』）と定義されている。「共振」が「共に振れる」という動作を第一にイメージさせるのに対して、「共鳴」は自然科学用語を離れた「同感」の意味で把握されている。その点、共振は漢字の原義で捉えるのに便利である。たとえ自然科学用語としては共鳴と同じ概念を担わされていようとも、共鳴を覆っている「同感」の意味が前面に表出されない利点を持つのである。共鳴という言葉では、何よりも、読みの反応のひとつに認められる反発や拒否の感情という重要な契機が抜け落ちてしまい、不都合である。読みの行為には、称讃や心服を核とする前向きの感動もあれば、反発や拒否というマイナスのエネルギーを内蔵した心の揺れがある。その点、「共振」という言葉には、その両者を包み込む幅と厚みが付与できるのであり、読みの重層性を究明していく上で共振の方がより適切ということなのである。嫌悪や反発の原因を探求することによって明らかになる書き手の内面の問題を重視する必要がある。対象への嫌悪や反発は、読み手の無意識層を炙り出す契機を担っており、嫌悪や反発を感じる要素に、作品という他者を媒介に現象する自己の内奥を焙り出す機能を失わせてはならない。

「読みの共振運動論」は、共に振れる魂の行為、共に響く心の行為、書き手や作品が存在して初めて動き出す概念装置である。大前提は、作品に描かれた登場人物の変容過程に何よりも読み手の関心が向けられているということ。作品の展開に伴い、登場人物はどのように変容していくのかという変化の相を、作品分析を通して跡づけることが作品理解の要となる。もちろん、変容しない登場人物の存在もありうるが、作品が書き進められていく時点で顕現する登場人物の変容過程に関わる書き手や読

み手の生の態様は、作品世界を生きる登場人物の生の態様を測定する計量器になぞらえられるだろう。とすれば、書き手や読み手に起こる共振運動過程の、登場人物の変容過程に発光する軌跡を絶対に見落としてはならないことになる。

そしてさらに、「読みの共振運動論」にはふたつの側面があることも付加しておきたい。「読みの共振運動過程」および「読みの自己変容過程」である。

これまで述べた事項を整理して示すと、次のようになる。

「読みの共振運動過程」の四つのレベル

① ひとつの作品を書き進める書き手の自作に対する読みの共振運動過程

② ひとつの作品を書き終え、新たな作品に着手する書き手の創作活動全般に対する読みの共振運動過程

③ ひとつの作品を読み進める読み手に現象する読みの共振運動過程

④ ひとつの、または複数の作品を通して現象する書き手に対する読み手の読みの共振運動過程

①と②は書き手に、③と④は読み手に関わる事項である。従来の考え方に倣って言うなら、前者は従来の書き手論や作品論、後者は読者論の範疇に編入できる。

「読みの自己変容過程」の四つのレベル

Ⅰ ひとつの作品を書き進める書き手に現象する読みの自己変容過程

Ⅱ ひとつの作品を書き終え、新たな作品に着手する書き手の創作活動全般からもたらされる読みの自己変容過程

Ⅲ ひとつの作品を読み進める読み手に現象する読みの自己変容過程

Ⅳ ひとつの、または複数の作品を通して現象する書き手によってもたらされる読み手の読みの自己変容過程

前記の四項目と同じように、Ⅰ とⅡ は書き手に、Ⅲ とⅣ は読み手に関わっている。そしてさらに、前者は書き手論や作品論、後者は読者論というように。

①〜④の共振運動過程は、Ⅰ〜Ⅳ の自己変容過程に対応している。①とⅠ、②とⅡ、③とⅢ、④とⅣ のように。なおかつ、共振運動過程は自己変容過程と連動し、「読む」は「書く」と同義であった一事を想起するなら、あえて「読み」の共振運動過程とか「読み」の自己変容過程と記述している理由もおのずと諒解できよう。

「読みの共振運動論」は、「読みの共振運動過程」プラス「読みの自己変容過程」を包摂した精神運動ということになる。こうした認識を保持しながら、書き手とその作品に対する読み手サイドの意識を不断に高めていかねばならない。人間の問題を

視座とした書き手と作品と読み手とをつなぐ共振の糸を切断することなく手繰り寄せること。作品の生成された時代の問題と、読み手の生きる時代の問題をいかに共振させたら実りある文学研究が達成できるかを問い続けること。読み手や書き手は、共振運動過程や自己変容過程を潜りながら、生身の人間と相似た構造を持つ「作品」という「他者」から常に何かを抽き出そうと努める存在として変容し続ける。

「読みの共振運動過程」は、書き手や読み手が作品に向き合う過程で現象する新たな自己に邂逅する過程と意味づけられる。「読みの自己変容過程」は、その新たに邂逅した自己に、それまでの自己が目覚めさせられ、変容する過程である。対象から何ものかを抽き出す「読みの行為」は、読み手と書き手の読みの抽象作用に注目する「読みの共振運動論」に理論化されている。

最後に、「第一部　本論編」の「方法の磁場」で提示した五項目を取り込んだ「文学研究方法上の基本理念」を提示する。この基本理念はさまざまな文学現象を、読む行為と共に起動する「読みの共振運動論」を手がかりに把握すると共に、書き手と読み手双方の内実を豊かにするために編み出された方法である。すべての項目に、文学現象としての書き手やその作品から何を抽き出すかという意図が明示されている。

文学研究方法上の基本理念

〔一〕「読みの共振運動論」は、書き手と読み手双方が書く行為や読む行為を通して、不断に対象から何ものかを抽き出そうと試みる文学理論である。書き手や読み手は、自己に必要な文学という言葉の対象を追い詰めながら、みずからを生かす何ものかを必死に抽き出そうとする存在である。

〔二〕書き手は作品を書く行為を通して、新たな自己に立ち向かう存在である。と同時に、読み手は書き手とその作品の読みの行為を通して変容する存在である。このことは、取りも直さず、両者が常に相補関係にある事実を示している。書き手と作品と読み手とは、循環構造を形作る「読みの共振運動論」――すなわち、「読みの共振運動過程」と「読みの自己変容過程」を包含する精神運動のダイナミズムに身を委ねる存在ということになる。

〔三〕書き手が言葉によって世界を分節するというテーゼを具体的な形として言語化したものがひとつの文学作品とするなら、読み手は、特定の書き手の出発期から最晩年に至る道程を通観しながら、そこに刻印された書き手とその作品の特質を浮き彫りにする意識を堅持しておかねばならない。

〔四〕読み手は、書き手とその作品の表現構造を浮き彫りにする作業を通して、究極的には文学史上の独創を定立する必要がある。

この四つの基本理念を軸に、これまで論じてきた内容を総括しつつ、読みの方法上の留意点をまとめると、以下の五点になる。

（1）前向きの感動を核とする積極的な反応であれ、反発の感情を内蔵するマイナスのエネルギーであれ、書き手とその作品に対する共振運動論を基点に据えたみずからの考えを構築しなければならない。書き手とその作品への架橋とは、自己の生を棚上げせずに果たされる作品の構造分析と、それら複数の作品分析の上に構造化される書き手の全体像の中に樹立されることになる。書き手にとって作品は未知の領域を備えている。と同時に、読みの行為を通して考究される作品像は、さらにいっそう未知の自己の領域から現象する要素に満ちている。「読みの共振運動論」とは、未知の書き手や作品への共振運動、いまだ知られざる自己への共振運動を基軸に展開されるダイナミックな言語行為論ということになる。

（2）「書き手の死」という概念は、「作品の死」をもたらす両刃の剣である。書き手と作品は常に読み手を媒介にした「読みの共振運動論」を基軸として、時代を超えて共振する新たな意味を求めて変容し続ける。書き手の側に作品の謎を解明する契機が内包されている場合もあれば、作品がその逆の働きをすることもある。傑作と称される作品においては、人生の本質に関わる問いが書き手の人生の謎へと立ち向かわせる場合が少なくない。「書き手の死」という概念は、作品を読む醍醐味を半減させる要素を持っている。

（3）文学研究において、人間とは何かという視座が欠落すると、文学研究と文化研究の区別が曖昧になる。書き手がその作品に託して描いた問題は、日本近代文学の場合、人生いかに生きるべきかという命題であった。作品が時代の影を引きずり、書き手が時代精神を反映することが事実であるのなら、なおさら時代の問題を読む視点と共に、時代に規定されて生きざるをえない人間の問題に注目する必要がある。明治以降の文学者たちが必死に解決しようとしたさまざまな問いの中には、人間の解放という命題が含まれていた。日本近代文学の読みの視座に、文学は人生と共にあるゆえに、人生と芸術の相関図を計量しうる問題意識を保持することは重要不可欠な要素にほかならない。

（4）小説はどのように書いてもよいというのが真実なら、文学の読みの方法も千差万別あってよい。読みの方法は、書き手やその作品の復権を果たすべきさまざまな視点を糾合しつつ、両者の有機的な連関やその連動した関係構図を手がかりに、最終的には作品を成立させる書き手の問題を究

明する作業の上に果たされる。個々の作品は作品成立時点での方法やモチーフ・テーマ・文体・時代思潮・ジャンルの問題といった多角的な視点から検証されねばならない。その究極の目的は、書き手が作品を紡ぎ出す磁場の確認にある。創作活動の原初に発光する精神の劇を目撃することは、書く行為にまつわる創作の秘儀を探究することに重なる。作品の構造分析はミクロ的な作業に属し、その構造分析を踏まえた文学者研究はマクロ的な視点の上に成立する。読み手は、遠心的かつ求心的な「読みの共振運動論」の磁場に自己を解放する者でなければならない。

（5）書き手が作品を書く行為と、読み手が読みの問題を問い詰める作業は同次元の行為であり、そうであるなら、両者は書く行為や読む行為において何を目差しているかが問われることになる。人間とは何か？　社会と人間の関係は？　人生をいかに生きるべきか？　という問いかけは、書き手を契機とする読み手の人生への問いかけでもある。両者が共にあるべき自己の生に、日本語という言葉や表現を通して参入する領域が日本近代文学研究という学問体系である。「読みの共振運動論」の要には、文学を手がかりに、そうした書き手と読み手の人生の問いを解明する意図が存在する。たとえそれが反発を契機とするものであれ、そこに刻印された感動の源泉は、必ずや両者の生を豊かにしてくれるはずである。

第二章「檸檬」は、第一章「読みの方法」を「檸檬」に適用したらどうなるかという実践報告である。すなわち、「檸檬」は、第一部本論編第四章で述べたような「美的自己慰安の文学」ではなくなり、語り手の「自己変容」を内包した可能性の文学に刷新されることになる。従来、レモン爆弾の稚気は、たわいない一過性の行為に過ぎないと認識されてきたが、語ることの意義や過去の対象化の作業を自己変容の視点から辿り直すと、単なる幻想行為の賜物という一時的な慰安から、現実変容の新たな次元に浮揚可能な行為として意味づけられることになる。「檸檬」が時代を超えて読み手に共振する最大の理由は、青年期の生の煩悶を描くのみならず、その煩悶を解消する心の不可思議さが整然と語られた語りの構造にある。「えたいの知れない不吉な塊」というキー・ワードを、芥川龍之介が自殺の理由に挙げた「僕の将来に対するぼんやりした不安」（遺稿「或旧友へ送る手記」、『東京日日新聞』ほか、一九二七・七・二十五）に対置してみるなら、大正文学と昭和文学の結節点に梶井文学の出発と芥川文学の終焉が期せずして刻印されている象徴的な事実が浮かび上がってくる。レモン爆弾を据え付けた丸善の美術棚（アングルに代表されるヨーロッパ絵画）をカリフォルニア産のレモンが爆破する構図は、第一次世界大戦後のヨーロッパ文化を席巻するアメリカ文化の寓意と見なすことも不可能で

はなくなるのである。

第三章「路上」では、文学用語としての異化作用を見事なまでに実践した作品として「路上」を把握する。「路上」は、書くことによる新たな自己の意味づけや世界の再発見を告知した作品にほかならない。すなわち、言葉がすべての起点となる文学の原初を開示するという意味での、言葉を起点にした文学研究＝「読みの共振運動論」がまさに応用可能な見本と言える。書き手と読み手が作品を媒介に自己変容していく過程を想定することは、書く行為と読む行為の相同性に思いを致すかぎり有効である。

第四章「読みの方法再説」および第五章「新たな書き手論に向けて」では、第一章「読みの方法」における「読みの共振運動論」を脱構築するためのさまざまな視点を再検討する。とりわけ、三好行雄における作品の自立性の問題や、田中実の「諒解不能の他者」「自己倒壊」「作品の意志」といった概念は、「読みの自己変容過程」を鍛える内容を孕んだものとして検討に値しよう。

〔六〕 資料編

Ⅰ においては、梶井文学の代表作である「檸檬」研究史を概説する。「檸檬」研究史は梶井文学研究史と見なせるほどに、多くの「檸檬」論は梶井基次郎論の一翼を担う形で積み重ねられている。没後七十年以上に及ぶ「檸檬」研究史は、梶井文学研究史を踏まえた上で展望するのが最善である。その際、分析格子を ⓐ～ⓕ の六項目に整理し、それぞれの項目に逸せない文献を列記しながら、簡略な説明を試みた。

ⓐ資質論からのアプローチ
ⓑ美的側面からのアプローチ
ⓒ東洋的⇔西洋的側面からのアプローチ
ⓓ文体論からのアプローチ
ⓔキー・ワードからのアプローチ
ⓕその他の「檸檬」論

このほか、小林秀雄「文芸時評―梶井基次郎と嘉村礒多―」（『中央公論』第四十七年二月号、一九三二・二）に始まる代表的な七編の「檸檬」論を紹介し、さらに今後の「檸檬」論に有効な七項目の研究テーマを提示した。

Ⅱ においては、単行本として刊行された研究書の書誌情報と目次を掲げた。個人単行書四十二冊、文学鑑賞講座・研究叢書類九冊、雑誌特集号十九冊の書誌情報と目次が掲載されている。研究史を踏まえた梶井文学の価値を闡明するためには、将来にわたる丹念な文献収集が必要となろう。

Ⅲ においては、檸檬忌に関する小文四編を掲載した。

Ⅳ においては梶井基次郎略歴を掲げた。

結語

本書は、梶井基次郎の事実に関わる伝記研究ではなく、文学史や読みの方法を取り込みながら、初期習作から絶筆「のんきな患者」に至る個々の作品価値や生成過程を書き手と読み手双方の視点を堅持しつつ総合的に問い詰める試みであり、そこに本書のタイトルを「梶井基次郎の文学」とする理由があった。

さまざまな人との出会いが、個々人の生き方に作用する事実は誰しも認めるところで、むしろそうしたことを意識しないほどに、人間が人間を変える事実は当たり前の通念になっている。こうした人間の力を作品の価値に置き換え、それを個々の書き手や文学作品の問題として読み手の側から意識化したいというのが、本書における「読みの共振運動論」の初発のモチーフであった。

歴史的存在としての生身の人間（他者）に各人が動かされるのと同じように、文学作品やそれを制作した書き手に強く左右された経験を否定する人はいないであろう。そういう意味では、作品とその書き手は、生身の他者と同じ働きを有している。文学作品を読むことが人間を読むことに通じるのは、他者としての人間の問題を追究することが他者としての作品に出会うことと、まったく同じ行為だからである。事実、文学作品を生きる糧として考えるようになって以来、書き手と作品は生身の人間と同じように読み手の私を規定し、左右し続ける媒体として意識されるようになった。そうした日常性の中から、「書き手―作者―作品―読者―読み手」という連鎖構造が血肉化され、書き手の書く行為と読み手の読む行為が同次元の内実を孕むものとして認識されたのである。書き手が作品を書く行為を「共振運動過程」と捉えるなら、読み手の側にも書き手と作品に向かう精神の軌跡がひとつの運動態として認識される。と同時に、書き手の書く行為とその結果としての作品が何らかの意味を持つとしたなら、それは書き手に少なからぬ変容を強いることになる。そしてそれは当然読み手の側にも波及し、そうした書き手と読み手の側に起こる変化の相（層）を「自己変容過程」と規定することが可能になるはずだ。――という確信が、『梶井基次郎研究』の刊行以来徐々に醸成され、かつ、この二十年間の紆余曲折の過程に刻印されつつあったと言えよう。

本書は、従って『梶井基次郎研究』を「読みの共振運動論」の視点から焼き直す意図を持っている。人文科学研究をいかに客観的な自然科学研究に近づけるかという議論は、将来にわたる永遠のアポリアにほかならない。しかし、「客観」なるものは視点の入れ換えによって百八十度変わる可能性を秘めている。それは自然科学といえども似たようなもので、視点の据え方によって客観なるものは動く、というのが実際である。すなわち、研究史を視野に収めた『梶井基次郎研究』じたいも、私の主観から自由ではありえなかったことになる。「読みの共振運動論」は、そういう読みの恣意性からいかに自由になるかという観点から編み出された方法で、書き手や作品と読み手の相互作用に重点を置く読みの理論として機能した場合、それなりの効果が

期待できる。そして、書き手や作品から読み手が何を抽き出すかということが書き手や作品を価値づける行為の重要性に密接に絡むゆえに、なおさら書き手と読み手の共振運動過程や自己変容過程が切っても切れない螺旋運動としてクローズアップされてくるのである。

「読む」という行為が読み手の価値判断と強く結び付いた精神運動であることは論を待たない。抽き出す行為は、読み手の認識の方向性を示すと同時に、書き手や作品の価値づけに関与する。その価値づけはいかにして可能か。本書の企図は、そうした書き手と読み手の相互作用を梶井基次郎の文学を実例として検証することにあった。その試みがどれくらい達成されたかについては、本書を繙く個々の読み手の判断を仰ぐしかないだろう。作品は書かれた時点で書き手の範疇を離れる。本書も「私」という書き手の思惑を離れ、広く読み手の価値判断の磁場に投げ出されることになる。スリリングと言えば、これほどスリリングなことはない。

そしてさらに、本書の行文においては「作家」という言葉に代えて「書き手」という言葉を使用したことを付け加えておきたい。詩や小説や戯曲・短歌・俳句・批評文など、すべての言語芸術を制作する書き手の意味を含ませるためである。また、時においては「文学者」という言葉を使用した。文学者を、詩人・小説家・歌人・俳人・劇作家・文学研究者などを包含する言葉と見なすためである。なべて言葉を紡ぐ者は書き手で、文学者は言葉を媒介にして、事物を本質論的に追究する書き手の代表格にほかならない。従来の「作家」に代えて、あえて「書き手」や「文学者」という用語に固執したのは、あらゆる領域の書く行為を想定した語法でなければならないと判断したことによる。

【付記】

本書によって、私は二〇〇六年十月十日、熊本大学から「博士（文学）」の学位を得た。本稿は、二〇〇六年九月九日（土）、熊本大学大学院社会文化科学研究科で行われた学位論文公開発表の資料として作成されたものを原型とする。

今回、森正人先生の退官記念論文集に寄稿するに当たり、もう一度手を入れ直し、ブラッシュアップした。純然たる学術論文とは言えないが、今後、決定版『梶井基次郎の文学』を刊行する際の一章として想定し、あえて発表する。

「第三部　第一章　読みの方法―「読みの共振運動論」の提唱―」中の「書き手―作者―作品―読者―読み手」の連鎖構造に関しては、新たに「読者」の概念を盛り込む形で整序すると共に、文意を明快にするために、一部『梶井基次郎の文学』の文章を改めた。「書き手―作者―作品―読者―読み手」という読みの連鎖構造に関し興味をお持ちの方は、拙論「「読みの共振運動論」という読書理論の提唱」（熊本大学文学部国語国文学会編『国語国文学研究　伊原信一教授退職記念特輯号』第四十八号、二〇一三年二月）をご参照いただければ幸いである。

（こが　あきら／
大学院文学研究科第七回修了／鹿児島純心女子大学）